

音楽教育

文化を紡ぐこと、そして教材と授業

石 窪 満

一 分科会討議の基調にかかわって

文化を紡ぐこと、そして教材と授業

今、子どもたちは、できるだけ効率的に、切り刻んだ知識を反復・訓練で詰め込み、「学力テスト」で順位がつけられ、自己責任を突きつけられるという競争と成果主義にさらされている。その中で、将来の夢を描きにくい閉塞した時代、戦争の危機さえ感じる時代を、必死に生きていくようにも思われる。また若い教師たちも、「数値化した教育目標の提示」「形式的な書類の提出期限厳守」など、徹底した管理体制の下で、「こどもたちの声に耳を傾け、一人ひとりを大事にしたい・・・」という気持ちもくじけてしまいそうな状況におかれている。

しかし、そうであっても、いや、こんな時だからこそ、子ども

もたち一人ひとりの問いや高まろうとする兆しを、また埋もれた願いを敏感に受けとめたいものだ。学習の主体は子どもたちなのだから。

今、子どもたちを取り巻く文化は、マスメディアやネットを通じてきわめて多様で、その趣向もさまざまだ。しかし、だからといって子どもたちの文化は豊かかといえればそれは別問題だ。今の視聴率万能主義で、面白おかしく受けのいいものだけが生き残り、肥大化する状況の中で、時代に遅れまいとする好みだけが優先し、自分の問いや悩みをあいまいにした受け身の文化ではないかと思う。そして教科書では、夢とか希望、感謝、仲間などの詩と共に心地よいリズムとが一緒になって抽象的な思いだけ響き、技巧的に教え込もうとする音楽は、子どもたちの内面を空虚にし、本当の音楽活動から遠ざけてしまい、感性をも鈍くさせているようにも思う。

私たちの希求する音楽の教室は、自分の存在に自信を持ち、学ぶ喜びが成長する喜びであり、未来の自分をつくっていく、つまり生きる喜びにつながる音楽でいっぱいにする、そのことが新しい文化を紡ぎ創造することではないかと思う。文化を紡ぐという営みと、教材をどう選ぶか、音楽の授業をどうするかということとは、切っても切れない関係にあるといえる。

私たちは、今までの教研での学び合いの歴史の中で、子どもたちの生き生きとした内面活動を大切にし、引き出し、豊かな表現活動を保障し、歌う喜びを共有することを大切に学び続けしてきた。今年も子どもたちの事実を出し合って、学び深めたいと思う。

〔石窪〕

二 実践報告とレポート発表

今回は、小学校の実践と中学校の実践及び小中併置の小規模校三本のレポート提案があった。

事前に釧路と松山からレポート提出の報告があったが、分科会の話し合いを深める立場から共同研究者からも提案レポートを用意した。(昨年も触れたが、運営側(司会者・共同研究者)からも積極的にレポートを用意し分科会に参加しようという取りくみが提起されている。)よって結果として三本のレポートが揃い、小学校、中学校そして小中併置校の小規模校という各種の実践を学び合う分科会となった。

分科会では、それぞれのレポート報告に対して、質問、感想そして十分な討論のための時間が保障され、また討論内容もそれぞれに対して共感的に受け入れられ、話し合いが深められたと思う。

ここでは、それぞれのレポート提案の特徴的な内容を、提案者の原文を尊重し、引用も含めて報告したいと思う。

1. 文化委員会の取りくみと歌うって楽しい!

山口 政世 (釧路市立城山小学校)

釧路市内にある城山小学校は全校児童数一八〇名、全学年とも一学級の市内では小規模の学校だ。報告者は通級指導教室を

担当して三年目。音楽の授業としては持っていないが、委員会活動の中にある「文化委員会」の取りくみを通して音楽の楽しさを子どもたちと共有してきた実践が報告された。

児童会の活動として、文化委員会は各学年三名、全員で九名の委員会だ。「全校合唱以外にも、みんなで歌える歌があるといいよね。」という動機からはじまった「うたごえ朝会」は年間にわずか五回、しかも朝の一分間という限られた時間の取りくみといえる。その中で、教材をどう選ぶか、どう渡すか、そしてそれを教師主導にしないで子ども主体の活動を大切にしたい文化委員会の事前の取りくみ、子どもたちとのやり取り、子どもの「心の揺れ」を通して新しい自分を発見しているさまを具体的な実践内容を示してくれている。

その取りくみとしてレポートの一部を紹介しよう。

新企画 うたごえ朝会

まずは、一回目のうたごえ朝会(五月一四日)に向けて、準備スタート!新学期にふさわしく、他の先生方にも受け入れてもらえそうな「きょうがきた」(谷川俊太郎詩 林光曲)に決めた。

改めて練習をしていると、最後の「♪根をはれ、胸張れ、目をみはれ」の音域がぐんぐん上がって、意外と高いことに気がついた。「高いファなんて、出せるかな。」と心配です。

文化委員会の子どもたち(全員女子)に、模造紙の歌詞を作ってもらい、歌の練習をします。以前、担任していた子たちが

いることもあり、すぐに歌えるようになりました。六年生は「高い・・」と辛そうでしたが。

さて、本番です。まず、歌詞を読む練習をしました。たけのこは一日に一〇cmも伸びること、床も屋根も突き破ってぐんぐん大きくなる話を織り交せて。次に、文化委員会の子たちになり、歌の練習。二回ほどで、だいたい歌えるようになり、なんとか二番も練習できました。最後に通して歌って、この日は終了。

すっかり歌っているように見えたけど、子どもたちからの声が届いてこないのが、楽しんでもらえたか、この歌を好きになっただけでよかったから、これから毎日練習します。」とのこと。そうじゃないんだけど、どうしたらわかってもらえるのかな。まあ、まだ始まったばかり。私は、私の全力で子どもたちに歌を届けよう。

二回目のうたごえ朝会は、七月一六日。夏の歌で、あまり難しくもない歌と思い、「つまさき きらきら」(A・A・ミルン 詩小田島雄志訳詩 林光曲)に決めて、準備を進めた。

文化委員会で、歌詞の準備と歌の練習をしました。四年生の子は「今度は何を歌うの?」と、楽しみな様子で、少し嬉しい。歌詞を読みながら、「夏の青空の下で、葉っぱがキラキラと光っているのって、とってもきれいだよね。」と話したけれど、「見たことがない」という子が結構多かった。この歌をきくか、けにして、「ちよっと空を見あげてみよう」という気になって

くれたら嬉しい。

この日も、二、三回歌っただけだったけれど、三拍子にのって言葉はうまくはまっていたと思う。

当日は、歌詞に関するクイズを出題した後、文化委員会の子どもたちに歌ってもらい、みんなで練習する流れにした。クイズの答えを見つけようと、集中して聞いてくれるだろう、というのがねらいだ。「つまさき・・」は三拍子の曲なので、音読して練習するにはリズムが合わない、ということが理由でこのように考えた。

曲名の「つまさき」の部分を紙でかくし、何がきらきらしているかを三択から選んでもらう、というクイズにした。三択は、一、おひさま、二、はっぱ、三、つまさき、という内容。もう一か所、「♪ひらりり ひらりり」も三拍子のこの曲をよく表していると思い、そこも三択問題にした。

三回歌い、なんとか歌えるようになってこの日のうたごえ朝会は終わった。

(略)

一〇月から後期委員会が新しいメンバーで始まった。各学年三人ずつ、四年生は三人とも男の子だ。後期のうたごえ朝会は一月一九日の一回だけ。一回しかできないなら、やっぱり「十二月の歌」(湯浅芳子詩 林光曲)と決めていた。

(略)

さて、十一月のうたごえ朝会。一年に一度、大みそかの夜に、森の中で一月から二月の神様が集まって、大きなたき火を燃やす話だけして、歌を渡した。

はじめは小さな声だったが、だんだん大きくなり、三回目、「たき火が空まで届くように！」と声をかけて、体育館いつぱいの歌声になった。

職員室に戻って、教頭先生から「声出てたね〜」と声をかけられた。ほかの先生からも、「男の子、歌、上手だね。何年生？」と、聞かれた。四年生は、一、二年生の時に私が担任し、「十二月の歌」を歌っている。この子は「十二月の歌」が大好きで、練習のときからはじめて歌っていた。それで、朝会のときも目立っていたのかもしれない。

後期の委員会では、毎回、少しでも歌を歌うようにしている。先日の委員会で歌った時、ずっと「高い音が出ない」と気にしていた六年生が（この子は、前期から引き続き文化委員をやってくれている）「先生、声出るようになったよ。思い切って歌ったら、出たさ〜。」と教えてくれた。高学年を担任したことがない私は、子どもたちには「慣れれば、だんだん高い音も歌えるようになるよ。」と話してはいたが、自分の実践ではなかったもので、内心すごく心配だった。それが今回、「歌えるようになった！」と、歌に向かっていく姿を見ることができて、とてもうれしかった。

低学年の子どもたちにも配慮した言葉かけや子どもとの接し方が柔らかく、子どもを受け入れる教師の姿勢が伝わってくる。また、教材を選ぶことについても、例えばアニメソングなどであれば、みんなが喜んですぐ歌えるということで、教師も含めやすく受け入れられるという状況の中で、今これを伝えたい

という教師の願いや文化を大切にしているところから学ぶべきことが多い。

レポートのまとめの部分を紹介しておこう。

歌う喜びを子どもたちに

今回の実践で一番心に残ったのはYさんの変容だ。Yさんは六年生の女子で、前期、後期とも文化委員会に入ってくれた。

前期は、「（音が）高くて声が出ないってみんな言ってるよ。」と、自分の意見としてではないが・・・、といった感じで遠慮がちに伝えてくれていた。

後期、引き続き文化委員会に入ったのも「やる人がいなかったから」と言っていたが、もう一人の六年生と一緒に次第に楽しく歌うようになり、ほどなく高めの音域も声が出るようになり、歌える喜びを体いっぱい表現しながら歌うようになった。六年生の担任が「『今日、委員会ある！やったり！文化委員会、超最高！』って言っていましたよ。委員会をこんなに楽しみにしている子たち、初めてです。」と教えてくれた。

六年生の音楽の授業でも歌は歌っているはずだ。一体、何が違うのか。

それは多分、強制されていない自由さと、歌いたくなる音楽がそこにあること、だと思ふ。子どもたちの気持ちにびつたり音の動きとリズムの心地よさが、歌いたい気持ちにさせる。「歌わなければいけない歌」と「自分の意志で歌う歌」の違いだろう。

「教科書にあるから歌う」のではなく、教師である私自身が歌うことの楽しさ、音楽の素晴らしさを感じる歌を、これから子どもたちに届けていきたいと思う。

2. 「繋ぐ音楽」から「繋ごうとする音楽」へ！・を指して

安里 栄子(上ノ国町立上ノ国中学校)

松山管内にある上ノ国町立上ノ国中学校は、スポーツの部活動や地域の少年団活動が盛んなところ。しかし、音楽に対しては、少し身構え周りの様子をうかがうようなところがあり、音楽環境も決して恵まれているとはいえないという。

そんな中、学校祭を一つのきっかけにし、全校で合唱に取り組み、一つの音楽をつくりあげるまでには、困難なことがあっても「やっぱり音楽ってイイ！」と思えるような活動を大切にしたい。そして「自分たちが表現しようとする、伝えようとする、繋げようとする音楽へ！」と願っているとレポート冒頭で熱く語っている。

レポート内容は、合唱教材としての「いつか この海をこえて」(釜石東中学校生徒の思いをここに〜)(混声三部合唱)の実践報告。この曲は、東日本大震災で甚大な被害を受けた釜石東中学校の生徒の思いから作曲されたものである。

教師とこの合唱曲との出会い、その強い思い入れは、この曲をもっと知りたい、釜石東中学校を訪問したいという思いを突き動かし、実際に作曲者へ手紙を書いたり、被災地や釜石東中

学校を訪問するという行動を起こすことになる。その経験をもとにしながら学校祭の全校合唱、合唱コンクールまでの取り組みを、教師が配慮したことや生徒の短い感想を織り交ぜて報告している。

ここで教師や生徒が取りくんだこと、思ったことを【ツナグ1】として整理してあるので、それを抜き取ってみよう。

【ツナグ1】いよいよ、上中の生徒へ何を伝えよう・・・

迷った末、二学期のスタートの各クラスの授業で今回のことを取り上げました。

(1) ミマスさんのメール(途中まで読み上げ紹介)

*注 「ミマスさん」は作曲者のこと

(*メール内容省略)

(2) 釜石東中学校って(震災のこと、その中から曲が生まれたこと)

(3) 直接訪問した映像(学校・釜石鶴住居地区の風景)

(4) 写真(町・歌詞)

(5) ミマスさんのメール(残り読み上げ紹介) ↓歌詞の仕掛けの意味

【ツナグ2】全校が「繋がるう」としているとき「がやってきた！」

この曲を全校合唱で歌う学校祭が近づき、生徒の学校祭実行委員会活動が始まりました。全校生徒から集めた言葉のアイデアをもとに学校祭テーマが決定。

「LINK」すべてが繋がるこの場所です」

・・・私がこの曲に出会ったときに感じた「繋がり」が、学校祭に向けてハッキリと言葉になり、びっくりしました。自分の思いと繋がり始めたような気がして・・・「目には見えない繋がり」の不思議を感じ、ドキドキしました。

【ツナグ3】“コンクール”に「隠れない」、 「見失わない」

ために！

この曲を全校合唱で歌う・・・ということは、上中では校内合唱コンクールの課題曲を意味します。学校祭（校内合唱コンクール）当日が近づくにつれ、“コンクール”形式にばかり気を取られず、この曲の持つ大切さを当日まで繋げなければ！と思いました。学校祭特別時間割開始から、毎日、音楽室で各クラスの練習が始まります。その日を目指して、音楽室のミニ模様替え（掲示）をしました。

合唱コンクールの取り組みが始まったばかりの頃には「最優秀賞を絶対とる！」とよほどのクラスも言葉にしていました。各クラス「最優秀賞を目指して」一生懸命取り組んでいましたが、学校祭当日に近づくにつれ「最優秀賞」の言葉は聞こえなくなり「クラス最高の合唱へ」と言葉の表現が変わっていきました。周りの先生方の指導のサポートもたくさん頂けたからだと思えます。

【ツナグ4】そして、学校祭（校内合唱コンクール）・・・

学校祭では、全校合唱の取り組みだけではありません。生徒たちは他にもやるのがいっぱいでした。当日はその集大成。プログラムも全校合唱は、最後で疲れもピークでした。音楽的にはまだまだ未熟な演奏ではありましたが、・・・けれども、少しずつ、生徒たちは、心や思いをつぶやき行動して、当日を迎え、この取り組みを通して何かを感じとっていました。

【ツナグ1】では、それまで自分が体験したこと、また準備してきた膨大な資料をもとに、取り組みの導入、動機づけとして実践してきたことをビデオで紹介された。

また、コンクール形式による合唱の取りくみは、今までの分科会でも何度も報告があり、コンクールという競い合わせる音楽と、一人一人の思いを大切に表現する喜びを保障する音楽との間には、たくさんの矛盾をかかえていることを話し合ってきた。【ツナグ3】では、その矛盾にきちんと向き合い、コンクールに埋没しない取りくみが、「周りの先生方の指導のサポート」と一緒に報告者の姿勢を感じることができた。次に「おわりに」というまとめの部分を紹介しておこう。

・・・けれども、生徒が互いに心を寄せ合い、「上中生徒らしさ」を、「表現する喜び」を、たくさんの生徒と一緒に経験できるようにするためには、まだまだこれからです。始まったばかりです。出会った曲を活かし、心と心が繋がりがあう・・・生徒たちが互いに繋げようとする音楽活動を目指して、私自身もまだまだ悩み、そして楽しみたいと思います。

(三つ目の「イメージはいつも新鮮にしたい」日常の実践記録から「石窪 満」のレポートは、紙面(字数)の関係から割愛することとする。)

三、今年度の特徴と来年度への課題

今年度の分科会の特徴としては、大きく次の五点が挙げられる。

①今回は三本のレポートが揃い、小学校及び中学校の取りくみ、そして小規模校の実践と、各種の実践を交流することができた。レポートを中心に日々の実践を話し合い、音楽教育を通して子どもたちの何を育てていくのか、真摯な意見を交換できたことは意義あるものだった。

②レポートの内容としては、全校集会の委員会活動の取りくみ、学校祭に向けた合唱曲の実践、そして日常の授業の子どもたちの変化を記録した実践というふうには、大きくは学校行事の取りくみが話し合いの中心となった。

③レポート発表においては、プリントによる提案に加え、実際の子どもの声、音楽を記録したDVD、CDによる発表があり、より具体的に話し合いを深めることができた。

④ここ数年、高校からの参加者が少ない中、運営側の司会者として高校の先生が加わったため、討論の中で、幅広い意見を聞くことができた。

⑤また今年も教職、保育士を目指す学生一七名の参加があり、

新鮮味のある感想をそれぞれが述べてくれた。それに対し、当日持ち込みの資料があったりもしたが、一般の参加者、先生方の参加が少なかつたといえる。

今後の課題としては、やはりレポート提出の確保とより多くの参加を呼びかけることだろう。昨年も提起したが、各地域からのレポート提出を確保するためにも、事前の取り組みをもつと意図的にしなければならいと思われる。各地域の教研活動を活発にするための取りくみも不可欠と思われる。

レポートの内容としては、もちろん学校行事等も含め、多様なレポートを期待しているが、日常の授業実践をもとにしたレポートも期待したい。また今年も文字による発表とあわせて録音等の記録した子どもたちの授業の音楽を聴いてもらおう提案があったが、具体的なイメージをつかむためにもこれからもこのような提案が期待される。

ただ、発表の方法としては、今年度はレポーターが初日に揃わず、(運営側で把握していなかった。)また、分科会参加者が一日目と二日目ではほとんどが入れ替わったこともあり、一日目に発表したレポートを二日目も発表しなければならぬという事態が起きた。ていねいな進め方ともいえるが課題も残した。会場についてだが、音楽の分科会会場にピアノがないということは今までにはなかったことなので、かなり戸惑ってしまった。ほとんどのレポートには実践した楽譜を添付しているので、教材を実際に歌いかわしたり深めるためにも必要と考えている。また再生機材も常設しておくことが望まれる。